
ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント

— アクセント抽出の理論と実践 —♦

三 村 竜 之*

要 旨

本稿の目的は、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料に基づき、ノルウェー南西部で話されるノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセントの音韻論的解釈を提案することにある。これまであまり深く考察されることのなかった「ストレス（強さ、強弱）アクセント」の概念について検討を加え、音調とストレスを一つのアクセント体系へと統合する独自の見解を提示する。

Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には高平調（アクセント 1, Acc1）と下降調（Acc2）のいずれかが現れる。標準方言に基づく伝統的な解釈案に倣うと二種類の「調素 toneme」や「語声調 word tone」が設定されるが、語全体の音調の型は主強勢の位置に応じて決まるため、語の長さ次第で型の数は二つ以上になりうることもあり、先行研究の解釈案は成り立たない。また、従来の解釈では Acc1 の音調型に観察される交替形を正確に記述することができない上に、その考察対象が第一音節に主強勢の現れる一音節語ないし二音節語に限定されているなど、問題が残る。

これに対し本研究では、様々な強勢の型をもつ多音節語も広く考察することで音調に関して音韻論的に真に有意義な特徴を導き、また強勢と音調の間に見られる従属関係に着目することで、Sandnes 方言のアクセントに関して以下の結論を導く：1) Acc1 と Acc2 の音調型はいずれも下降調から成り立つ；2) アクセント対立においては、主強勢を有する音節に対する下降調の現れる相対的な位置の違いが音韻論的に本質的な特徴である；3) Sandnes 方言のアクセントは、位置の異なる二種類の下降調のいずれかを伴う主強勢がアクセント核である、ストレスアクセントの一種である。

内 容

1. 序

- 1.1 本研究の目的
- 1.2 本研究の研究史的意義
- 1.3 先行研究

- 1.4 インフォーマント、資料、調査方法
- 1.5 表記
2. Sandnes 方言の概要
3. 想定される解釈案とその問題点
4. アクセントとは？
5. アクセントの抽出
 - 5.1 非関与的な音調の分離
 - 5.1.1 Acc2
 - 5.1.2 Acc1
 - 5.2 アクセントの抽出
 - 5.3 アクセントの弁別的特徴
6. 「強さ」か「高さ」か？
7. 結語
 - 7.1 まとめ
 - 7.2 今後の課題

1. 序

1.1 本研究の目的

本稿の目的は、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料に基づき、ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言 (以下、Sandnes 方言とする) のアクセントを純粋に記述言語学の立場から音韻論的に記述することにある。

Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には (主として) 高平調と下降調の二種類の音調が現れる。ノルド語 (北方ゲルマン語) 学の慣例に倣い、本稿でも、前者を Acc1 (Acc はアクセントの意)、後者を Acc2 と呼ぶことにする。

これまで筆者は、アルファベットによる略語 (アルファベット頭文字語) を含む複合語や三要素からなる複合語など、複合語におけるアクセントに関しては様々な観点から考察を行い (三村 2010a, b, 2011a, b)、その結果、未だに不十分な点がわずかに残りはするものの、Sandnes 方言の複合語アクセントの全体像を明らかにするに至った。しかしながらその一方で、単純語のアクセントの音韻論的な解釈に関しては、紙幅の都合から明確な言及を差し控えてきた。そこで、本稿では、Sandnes 方言の単純語のアクセント解釈にのみ焦点を当てて、詳細な考察を試みる。

加えて、本研究は、これまで筆者がノルウェー語以外の言語に関してアクセント解釈を行う際にも基盤としてきた理論的枠組み、並びにその実践方法を示すことも目的としている。アクセントの記述には厳密な手順が要求され、特にピッチ (高さ、高低) アクセントの場合は、真に音韻論的に有意義な音調とイントネーションのような音韻論的には有意義でない音調とを分離することが分析作業の上で重要となる。しかし、例えばノルウェー語のアクセント研究に限定してみても、先行研究のほとんどがこれら二つの音調を混同したまま無批判に議論を展開する嫌いがあった。本稿では、このような傾向に警鐘を鳴らす意図を込めて、筆者が理想とするアクセント記述の方法を提案する。

さらに、本稿では、これまであまり注意深く考察されることのなかった「ストレス（強さ、強弱）アクセント」という概念についても検討を加える。従来のノルウェー語のアクセント研究では、便宜上、音調とストレスを分離して議論を進めるのが慣例であったが、この二つの韻律特徴を統合する試みはなされて来なかった。そこで、本研究では、音調とストレスを一つのアクセント体系へと統合する独自の見解を提示する。

1.2 本研究の研究史的意義

ノルウェーは、その国土が南北に細長く伸び、また陸地のほとんどを山脈が占めるという地理的特性を有するが故に、方言間の差異は大変著しいといわれている。この点を鑑みると、ノルウェー語の方言研究は長い歴史を有することが容易に想像される。しかしながら本研究の対象である Sandnes 方言に関しては、アクセントに限定すればまとまった研究報告は極めて乏しく、構造的に類似する近隣の方言を扱った研究報告からその姿を窺い知ることができる程度である。Sandnes を含む Rogaland 県の県庁所在地であり、また Sandnes と地理的に接している Stavanger (スタヴァンゲル) で話されている Stavanger 方言は類似性が高いとされ、Stavanger 方言の記述 (例: Selmer 1927; Vanvik 1956 [1983], 1979) から辛うじて Sandnes 方言のアクセントの姿を窺い知ることが可能である (なお、分節音に関しては、Ofteidal (1947, 1972) が詳しい)。

このように、外国人研究者が利用可能な資料は (一連の拙論を除き) 皆無に等しいと言っても過言ではなく、したがって本研究は、まず第一に、研究報告の乏しい方言のアクセント資料を日本人研究者が利用できる形で提供するという点で、非常に意義のあるものと言える。

第二に、本研究は、これまでのノルウェー語アクセント研究における方法論的な不備を改善しようという点で意義があると考えられる。そもそも、ノルウェー語アクセント研究は、Kristoffersen (2000) に代表されるように標準語に関しては大変研究が盛んではあるが、ノルド語学の伝統を受け継ぐがために、考察の対象とする語例が一音節ないし二音節からなる固有語に偏るという問題点を残す。また近年のノルウェー語アクセント研究は、自律分節音韻論など音韻理論の枠組みに基づいた理論研究に集中しており、従って、ある特定の音声・音韻現象の、それもある特定の部分に関しては考察が行き届いているものの、その反面、一つの方言に関してそのアクセントの全体像を捉えるまでには未だ至っていないと思われる。本研究では、外来語をも対象として新たな視点から考察を進めるが、本研究の提示する方法論は、標準方言のアクセント研究を改善する上でも重要な視点を投げかけると考えられる。

なお、既に冒頭でも触れたように、本研究は「純粹」に記述言語学的な立場に基づいている。その意図するところは、生成音韻論や最適性理論などのいわゆる特定の音韻理論の枠組みに基づいて一般理論を構築するのではなく、飽くまでもフィールドワークにより得られた一次資料を通じて、その資料を過不足無く説明することにのみ考察の範囲を限定するということである。音韻理論の枠組みによる理論的研究の重要性は否定するまでもないが、そのような理論的研究に値する言語は、英語や日本語を始めとする、「記述」の進んだごく一部の言語であると筆者は考える。従って、利用可能な資料自体が乏しい Sandnes 方言は、ごく限られた特定の現象に基づいて性急に理論的研究を進めるのではなく、むしろその全体像を描き出すべく詳細な記述研究を行うことが先決である。本研究の成果が、今後展開が期待さ

れる Sandnes 方言の理論的研究への有益な資料を提供することはいうまでもなく、この点でも本研究は意義があると言えよう。

1.3 先行研究

既に前節で述べたように、ノルウェー語の方言研究は長年に渡る伝統があり、そのため、当然のことながら Sandnes 方言に関しても調査ならびに研究報告があるに違いないが、ノルウェー国外の研究者が参照可能な Sandnes 方言のアクセント資料は、管見に及ぶ範囲では皆無に等しい。しかしながら、隣接する都市の方言である Stavanger 方言は、Sandnes 方言に音声面では極めて類似しており、また Stavanger 方言に関する先行研究は比較的容易に参照が可能であるため、Stavanger 方言に関する記述を頼りに Sandnes 方言の姿を伺い知することは可能である。

とはいえ、Sandnes 方言自体の姿はあくまでも「窺い知る」ことができるに過ぎず、従って、量と質のいずれの面においても先行研究と呼ぶに値するものではない。そこで、本研究では、首都 Oslo (オスロ) の方言並びに Oslo 方言を基盤としたノルウェー南東部で主に用いられる標準方言 (Bokmål) を扱った研究に倣い Sandnes 方言のアクセントの解釈案を提案し、それを先行研究と想定して批判並びに検討を加えながら議論を進めていくことにする。

1.4 インフォーマント、資料、調査方法

本研究の資料は全て、筆者が Sandnes 方言の話者一名¹⁾をインフォーマントとして 2009 年から 2011 年にかけて実施した調査によって得られたものである。調査は大きく分けて二つの部分からなる：いわゆる「質問・解答形式」による基礎語彙調査と、「調査票読み上げ形式」、つまり印刷された調査項目を読み上げてもらう形式の調査とその後の確認作業を含めた追加調査である。

基礎語彙調査では、『アジア・アフリカ言語調査表』の上巻並びに下巻 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1967) を用い、身体部位の名称を始めとする基礎的な語彙の収集を行った。基礎的な語彙の収集を通じて Sandnes 方言のアクセントの大まかな姿は捉えられるものの、基礎的な語彙の多くはいわゆる「固有語」であり、その大半が (ゲルマン諸語全般に見られる特徴ではあるが) 一音節ないし二音節からなる主強勢が第一音節に現れる語のため、導かれる結論が偏ってしまう危険性がある。アクセント解釈はもちろんのこと、音韻論的な分析と解釈を精密に行うためには、複合語や派生語、活用形を含めた三音節以上の長めの語や、外来語など第一音節以降の音節に主強勢の現れる語も採取する必要がある。先に述べた追加調査はこのような資料の補充を主たる目的としているが、この他にも、基礎語彙調査の確認作業も並行して行った。

追加調査の調査項目は、Bokmål に関する先行研究 (例: Kristoffersen 2000) や系統的及び類型論的に近い言語であるデンマーク語に関する記述 (Hansen 1956; Mimura 2009) を参考に選定した。調査票は Bokmål を用いて作成した。調査全体を通じて使用した媒介言語は主として日本語だが、必要に応じてデンマーク語も使用した。

1.5 表記

本稿では、議論の際に引用する資料は、まずイタリック体のラテンアルファベットでその綴りを示し、続いて音声字母を用いてその音声を提示する。但し、Sandnes 方言は（他の方言と同様に）正書法が確立していないため、本稿では便宜的に Bokmål の正書法で代用している。

本稿で用いる音声字母は基本的には国際音声字母 (IPA) に準拠しており、煩雑になることを防ぐため可能な限り簡略表記を用いている²⁾ が、以下の三点に注意されたい。まず、音調の表記は tone letter を用いず H (高平調)、M (中平調)、L (低平調)、F (下降調)、R (上昇調) の記号を用いた。母音や子音といった単音を表記する音声字母に比べて tone letter はそれほど一般的でない点に加え、音声表記が煩雑になるのを防ぐ為である。また、一部の資料に限定はされるが、音声表記から速やかに Acc1 と Acc2 の別を判読できるよう、音声表記の頭に上付きのアラビア数字の 1 と 2 を付した (例: [¹], [²])。さらに、強勢の表記には、IPA で一般的に用いられている [ˈa] や [ˌa] (母音は任意) の記号は用いず [á] や [à] の記号を用いた。こちらも、音調を示すアラビア数字との混同を回避し、判読のしやすさを重視した結果である。ちなみに音声表記中のピリオドは音節境界を示す。

なお、H、L、M、F、R の記号は、飽くまでも各音節の音調を (音韻論的な解釈を経た上で) 大まかに三段階に分けて捉えた、いわば簡略的な表記に過ぎない点に注意されたい。従って、中国語の声調のように、それぞれの記号が各音節の固有の音調を示している訳ではなく、仮に同じ記号で表記された音調であっても、具体音声としては厳密には高さが異なる可能性も十分にある。また、H や M といった記号を用いるからといって、筆者が Sandnes 方言の音調を「調素 toneme」の連続として解釈している訳でない点にはくれぐれも留意されたい。

2. Sandnes 方言の概要

Sandnes 方言の話される Sandnes はノルウェー南西部に位置する Rogaland 県 (Rogaland Fylke) の一都市 (kommune) である。2009 年の統計では約 6 万 5 千人の人口を有するノルウェーで 8 番目に大きな都市 (by) である (典拠: <http://www.sandnes.no>; ノルウェー国内での Sandnes Kommune の位置に関しては稿末の地図も参照のこと)。

Bokmål と比較すると、Sandnes 方言は分節音のレベルでは様々な特徴³⁾ を示すが、本研究の主題である韻律的な側面においてはそれほど大きな差異は示さず、唯一指摘すべき特徴としては Acc1 並びに Acc2 の音調型が挙げられる程度である。

Sandnes 方言では (標準方言と同じく) 語は主強勢を担う音節を必ず一つ有し、その音節には (主として) 高平調 (Acc1) か下降調 (Acc2) のいずれかの音調が現れる。語例は非常に限られるが、音調の区別のみで対立する (疑似) 最小対も確認されている。具体例を以下に示す (Acc1 – Acc2 の順):

- (1) a. *korte* [¹kʰɔ̝.tə HL] 「短い adj.sg.masc./fem.⁴⁾」 — *korte* [²kʰɔ̝.tə FM] 「短い adj.pl.]

- b. *avtale* [¹á:v.tʰà:lə HML] (*sic*) 「約束する」 — *avtale* [²á:v.tʰà:lə FML] 「約

束」

c. *leser* [¹lé:.sə HL] (sic)「読む pres.」— *lese* [¹lé:.sa FL] (sic)「読む inf.」

なお、Bokmål との関連で特筆すべきは、Acc2 の音調は Bokmål と同じく下降調であるのに対し、Acc1 の音調は、低く平らに現れる Bokmål のものとは反対に高く平らである。そのため、Acc1 を伴う多音節語の音調は、主強勢を担う音節から後続する弱音節にかけて全体としてなだらかな下降調を描く。また、Acc2 に関しては、Bokmål では下降調の現れる音節以降の音節が（末尾音節を除き）低平調を伴うのに対し、Sandnes 方言では下降調の直後で一端中程度の高さに上昇し、その後語末にかけて漸次下降する点も特徴的である。

3. 想定される解釈案とその問題点

既に述べたように、Sandnes 方言のアクセントに関する先行研究は極めて乏しい。そこで、ここでは標準方言（Bokmål）あるいは Oslo 方言を対象とする先行研究に倣い想定され得る解釈案を提示し、その問題点を批判的に検討することで後の議論へと繋げたい。

まず、Borgström (1938: 260-263) などに代表される古典的な立場では、主強勢を伴う音節に Acc1 と Acc2 という二つの toneme を設定する。つまり、主強勢を担う音節に現れる音調の「種類」の違いが Acc1 と Acc2 を区別する上で有意義な特徴とする解釈である。

この立場では、確かに Acc2 の音調を適切に説明することは可能であるかもしれないが、Acc1 の音調を説明する上では問題が残る。というのも、(2) に示すような末尾音節に主強勢の現れる (oxytonal) 語では、H（高平調）と F（下降調）が任意で交替しうるからである。

- (2) a. *ned* [¹né:ɣ H~F] (sic)「下へ」
b. *avis* [¹a.vís MH~MF]「新聞」

もし主強勢を伴う音節の音調を「Acc1 = 高平調」、「Acc2 = 下降調」という図式で捉えてしまうと、末尾音節に主強勢の現れる語の音調を正しく捉えることができず、この点で問題が残る。

さらに、(3) に示すように、（特に）第二音節以降の音節が主強勢を担い、かつ高平調を伴う語の場合は、高平調に代わり任意で短い上昇調も現れる（R の記号で上昇調を示す）：

- (3) a. *Amerika* [¹a.mé:.xi.ka MHML~MRML]「アメリカ」
b. *beklaga* [¹be.kláj:ga MHL~MRL]「～を遺憾に思う」

Acc1 や Acc2 の音調を toneme として固定的に捉える解釈では、主強勢を伴う音節に現れる上昇調を適切に説明することができない。以上の二点から、主強勢を伴う音節に二つの toneme を設定する解釈は、Sandnes 方言のアクセント音調を正しく捉えてはいないと結論づけることができる。

同じく、ノルウェー語の伝統的なアクセント解釈として、例えば Vanvik (1956) が主張

するような、語には全て Acc1 と Acc2 という toneme のいずれかが被さっていると捉える立場がある。言わば、日本語アクセント論でいう「語声調」(早田 1999) や「N 型アクセント」(上野 1984) に通ずる解釈で、語の長さ(音節数)を問わず、音調の型は常に二つであるとする立場である⁵⁾。

一見すると妥当性のある解釈ではあるが、この解釈が成り立つためには語中の主強勢の位置が固定的であることが前提となる。というのも、既に言及したように、Acc1 の高平調や Acc2 の下降調の現れる音節は主強勢を担う音節であるからである。しかしながら、語における主強勢の位置は(1)や(3)に示した語例から読み取れるように、特定の音節とは限らない(5.1 節の表 1 と表 2 の語例も参照のこと)。つまり、語の音節数が増えれば、それに応じて主強勢の分布の可能性も増えることになり、その結果、語に被さる音調の型が二つ以上になる可能性も生じてくるのである。以上から、いわゆる「二型アクセント」的な解釈は成立しないと結論づけることができる。

4. アクセントとは？

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある⁶⁾。そこで本節では、Sandnes 方言のアクセント解釈を進めるにあたり、議論の出発点として共通の理解を得ておく必要があることを鑑み、筆者のアクセント観について簡単に述べておくことにする⁷⁾。

筆者の考えるアクセントの概念を一言で述べるならば、**特定の言語社会において慣習的に共有された、ある音声特徴を利用して実現される語の「音形」**である(なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密には(つまり音韻論的には)アクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる)。従って、アクセントが個々の言語において具体的に現れる際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない、と筆者は考える。典型的には、例えば日本語に代表される「(音の) 高さ／ピッチ」や英語に代表される「(音の) 強さ／ストレス」といった音声特徴が利用されるが、ある言語社会において慣習的に共有される限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「(音の) 長さ／音量」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、語を組み立てる分節音(語音)の情報から規定されるものではない、と筆者は考える。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与える可能性はあるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別(的)機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節の特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない

以上、分節音のレベルとは独立した自律的なものとして、つまりは「アクセント」として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、れっきとした「型」は存在するのである。

ここで注意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な音形」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この本質的、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に有意義でない特徴を分離することによって得られると考える。我々が実際に観察することができるのは、アクセントの上にイントネーションなど様々な音声特徴の被さった結果生じた重層的な物であり、従って、単に語を観察しただけではアクセントは得られない。アクセントは、観察した語の音声から様々な特徴を分離することによって「抽出」しなくてはならないのである。

ちなみに、アクセントを本質的に特徴づける特性は語の一か所にあらわれると述べたが、この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれが音韻論的に有意義な音声特徴を担いうる「声調 tone」とは異なる性質を有する。

では、ここで改めて「ストレス（強さ／強弱）アクセント」という概念について若干の考察を行いたいと思う。従来、ストレスアクセントでは、本質的な特徴は「(音の) 強さ loudness/intensity」であると唱えられてきた。しかしながら筆者は、確かに「(音の) 強さ」の存在は認めるものの、むしろその他の特徴がストレスアクセントの本質的な側面として働いていることを唱えたい。一つには、既に早田(1988)が指摘しているように、(主)強勢を伴う音節ではそうでない音節に比べて、現れうる母音音素の数が多い点が挙げられる。また、(主)強勢を伴う音節はそうでない音節に比べて、頭子音や末尾子音の子音連結の構造も複雑な傾向にある(強勢を伴う音節は、いわゆる「長い」あるいは「重い」音節が好まれる)。さらに重要な点は、主強勢を伴う音節、すなわちストレスアクセントにおいて最も重要な音節には、様々な種類の音調が現れうるということである。後に詳述するが(第6節を参照)、英語のように音調の種類が音韻論的に有意義でない場合もあるものの、ストレスアクセントにおいては、主強勢を伴う音節は種々の音調の出現を「許容する力」を有しており、換言すれば、音調の変動の「起点」を成しているのである。以上の点を総合すると、Sandnes 方言は、(ひとまずは) ストレスアクセントの言語であると結論づけて差し支えないと思われる(Sandnes 方言のアクセントの位置付けの詳細に関しては第6節も参照のこと)。

5. アクセントの抽出

ここでは、前節で述べた筆者のアクセント観やアクセント分析の方法に従って、実際に Sandnes 方言のアクセントの音韻論的解釈を提示する。

5.1 非関与的な音調の分離

5.1.1 Acc2

議論の都合上、Acc2の語例から検討する。次頁の表1は、主強勢を担う音節に下降調の現れる語を、音節数(ローマ数字で示す)と主強勢の位置(アラビア数字)に基づいてまと

表 1: Acc2 の強勢／音調型

	I	II	III	IV	V...
1	—	<i>kake</i> (sic) [k ^h á:ɡa FM] 「ケーキ」	<i>menneske</i> [mén.nəs.kə FML] 「人間」	<i>sparebørsa</i> [spá:ɐə.bœɾ.sa FMML] 「貯金箱」	<i>overvektige</i> (sic) [ø:və.væk.ti.ɡə FMMLL] 「肥満の」
2		—	<i>rutine</i> [ɾu.t ^h i:nə MFM] 「日課」	<i>allikevel</i> [a.li:kə.və] MFML] 「しかしながら」	<i>reklamebyrå</i> [ɾe.klɑ:mə.by.ɾø: MFMMML] 「広告会社」
3			—	<i>marmelade</i> [maɾ.mə.lá:də MMFM] 「マーマレード」	<i>krokodilletegn</i> [kɾo.ko.dil.lə.t ^h əɲn MMFML] 「不等号」
4				—	<i>humaniora</i> [hʉ.ma.ni.ó:ɾɑ MMMFM] 「人文科学」
5...					

めたものである（語例は引用形）。なお、主強勢が末尾音節に現れる語で当該音節に下降調の現れる語例はない（後述するように Acc1 と解釈される）ため、表中では「—」で示してある。網掛けの部分は該当する語例が構造的に許容されず存在しないことを示す。

表 1 に示した資料を検討することで、Acc2 の強勢並びに音調の型について以下の四点が明らかとなる：1) 語の長さ（音節数）や主強勢の位置に拘らず、主強勢を担う音節には一貫して下降調が現れる（なお、主強勢を担う音節に現れる音調を便宜的に「アクセント音調」と呼ぶことにする）；2) 主強勢を担う音節に先行する音節は常に中平調を伴い、語の音調形を相互に区別する上では関与的でない；3) 主強勢を担う音節に後続する音節は、常に末尾音節に向けて漸次的に下降しており、語の音調形を相互に区別する上では関与的でない；4) ただし、次末音節に主強勢の現れる場合は、末尾音節の音調は中平調である。上記の四点から、主強勢を伴う音節に現れる下降調を除き、語に被さる音調は全て音韻論的には有意義でないものとして分離することが可能となる。

なお、アクセントを抽出する限りにおいては、主強勢を担う音節に前後する音節の音調は全て捨象されることは既に説いたが、これらの音調は全て、（形態統語論的な意味での）「語」に対して規定されているものではなく、むしろ音調が被さるアクセント上の単位（ここでは暫定的に「アクセント句」と呼ぶことにする）の属性であると考ええる。以下の例を参照されたい（音声字母による表記は割愛する：文強勢の位置を のように下線で示す）：

- (4) a. (*Må jeg komme tidligt?* 「私は早くに来なくてはなりませんか?」)
 (Ja,) *du må komme tidligt.* 「(はい、) あなたは早くに来なくては
 なりません。」
 (yes) you sg. must come inf. early-neut.
 [M M FM FM]
 b. *Norsk er vanskelig.* 「ノルウェー語は難しい。」
 Norwegian be pres. difficult-neut.
 [M M FML]

上記の文は、いずれも一つ以上のアクセント句からなると考えられ、(4a)は“*Du må komme*”と“*tidligt*”という二つのアクセント句に分かれており、また(4b)は“*Norsk er vanskelig*”という文全体が一つのアクセント句を成している⁸⁾。(4a)のアクセント句“*Du må komme*”と“*tidligt*”ではいずれも次末音節にアクセント音調が現れているが、注目すべきは、いずれの場合も主強勢を担う音節に後続する音節が中平調を伴っている点である。この中平調はアクセント句の末尾の標識として機能していると考えられる。なお、(4b)が示すように、アクセント音調に二つ以上音節が後続する場合は、句末に向けての音調は漸次的な下降(...ML)を示す。このような句末に現れる中平調や漸次的な下降調は表1の語に共通して観察されるもので、いずれもアクセント句の音調が被さったものとして捉えることが出来る。

ここまでは主強勢を担う音節に後続する音節に着目してきたが、今度は主強勢を担う音節に先行する音節に注目したい。(4a)では“*Du må*”全体に、また(4b)では“*Norsk er*”全体に中平調が現れているが、これは、アクセント音調に至るまでの部分、いわばアクセント句の「句頭」の部分を表示していると考えられる。同様の中平調は、例えば表1の*marmelade*を始めとする第一音節以外の音節に主強勢の現れる語にも観察されるが、いずれもアクセント句の音調が被さった結果現れたもので、アクセント句の始まりからアクセント音調に至るまでの句頭の部分を標示している。

つまり、表1に示した語例が示す音調型は、アクセント句の属性である「句音調」が被さった結果現れたもので、アクセント音調を除いた部分は音韻論的には重要でないものとして捨象することが可能なのである。なお、ここで言うアクセント句は、大きさの点で、いわゆる形態統語論的な意味での「句」と同一である必要はまったくない。発話の意味内容を反映してアクセント上ひとまとまりを成せば、表1に示したような「語」であっても、(4)に示したような「文」であっても構わない点に注意されたい。

以上から、Acc2の音調型は、語中における主強勢の位置が決まればその他の音調が全てアクセント句の特性として規定されるため、自動的に導くことができると結論づけることが出来る。

5.1.2 Acc1

続いてAcc1の語例に移る。表2は、Acc1の強勢ならびに音調の型を、語の音節数と主強勢の現れる位置に基づいて分類したものである(語例は引用形で代表させる)。表2の資

表 2: Acc1 の強勢／音調型

	I	II	III	IV	V...
1	<i>gi</i> [jé:F~H] 「与える」	<i>vinter</i> [vín.təŋ HL] 「冬」	<i>ananas (sic)</i> [án.na.nas HML] 「パイナップル」	<i>reserbane</i> [ré:.səŋ.bà:.nə HMML] 「サーキット」	<i>språkskolelærer</i> [spɤ́:g.sko:.lə.lè:.kəŋ HMMLL] 「語学教師」
2		<i>byrå</i> [by.ɤ́: MF~MH] 「事務所」	<i>artikkel</i> [aŋ.tʰik.kə] MHL] 「記事」	<i>narkotika</i> [naŋ.kʰó:.ti.ka MHML] 「麻薬」	<i>karbondioksid</i> [ka.bón.di.ok.sìd MHMML] 「二酸化炭素」
3			<i>appelsin</i> [ap.pə].sín MMF~MMH] 「オレンジ」	<i>leninisme</i> [le.ni.nís.mə MMHL] 「レーニン主義」	<i>paradisepple</i> [pa.ɤ.a.dís.əp.plə MMHML] 【植物名】
4				<i>epidemi</i> [e.pi.de.mí: MMMMF~MMMHL] 「疫病」	<i>memorisere (sic)</i> [me.mo.ɤí.sé:ɤa MMMHL] 「記憶する」
5...					<i>universitet</i> [u.ni.væŋ.si.tʰét MMMMF~MMMMHL] 「大学」

料を検討することで、Acc1 の強勢ならびに音調の型に関して以下の三点が明らかとなる：

1) 語の長さを問わず、主強勢を担う音節には高平調あるいは下降調のいずれかが現れているが、下降調は主強勢が末尾音節にある語に、また高平調はそれ以外の語に限られており、どちらの音調が現れるかは主強勢の位置によって決まっている；2) 主強勢を担う音節に先行する音節は、Acc2 の場合と同様に、語の長さや主強勢の位置に拘らず常に中平調である；3) 主強勢を担う音節に後続する音節の音調は、Acc2 の場合と同様、語末にかけて漸次的に下降を示す。

上記の三点から、アクセント音調を除く音調は全て音韻論的には有意義でないものとして分離することが可能となる。ちなみに、Acc2 の音調型の場合と同様に、Acc1 の音調型から捨象することのできる音調は、アクセント句の属性として位置づけることが可能である：

- (5) *Er du japanske?* 「あなた、日本人ですか？」
 be pres. you sg. Japanese
 [M M HML]

(5) の文はそれ自体で全体で一つのアクセント句を成すと考えられ、アクセント音調に先行

する中平調（MM）はアクセント句の句頭を、また漸次的な音調の下降（ML）はアクセント句の句末を示している。中平調や漸次的な下降調は、例えば表2に示した語例にも確認することができ、それぞれアクセント句の句頭と句末の標識として機能していると考えられる。

なお、上記の1)で述べた末尾音節に主強勢の現れる場合の下降調であるが、これも句末を標示する音調の一種であると考えられる。以下の例を参照されたい（音声字母による表記は割愛する）：

- (6) *se* *på* *film* 「映画を観る」
 see inf. on movie
 [M M F(~H)]

(6)は、形態統語論的な意味においての句の例であるが、この句全体が一つのアクセント句を成すと考えられ、*film*はアクセント句の末尾の位置に下降調を伴って現れている。ここから、*gi*や*byrå*など表2の末尾強勢の語に現れる下降調もアクセント句の終わりを標示していると考えることが出来る（アクセント音調である高平調が句音調である下降調となぜ交替しうのか、また下降調の意味に関しては、5.2節を参照されたい）。

以上をまとめると、Acc1の音調型も、Acc2の場合と同様に、語中における主強勢の位置が決まればそれに応じて全て自動的に導くことができると結論づけることができる。

5.2 アクセントの抽出

前節では、主強勢を担う音節に先行並びに後続する音節の音調が「アクセント句」とよばれるまとまりの属性であり、語中での主強勢の位置に応じて全て自動的に導かれるため、音韻論的な分析においては取り去ることが可能であることを明らかにした。

この点を踏まえて改めて(1)に示した（疑似）最小対の例や表1の語例を検討すると、Acc2において音節数の等しい語の音調型を相互に区別する上で有意義な部分は、主強勢を担う音節内部での音調の下降（F）のみであることが明らかとなる。

一方、Acc1の場合も同様に、(1)の（疑似）最小対の例や表2の語例から、主強勢を担う音節内部の高平調（H）が長さの等しい語を互いに区別する上で有意義な部分である、と結論づけられそうであるが、この点に関しては問題が残る。というのも、(2)の語例や表2の*byrå*や*appelsin*などの語例が示すように語末の位置では主強勢を担う音節に任意で下降調（F）も現れることがあり、また(3)の語例が示すように高平調の現れる主強勢を担う音節には短い上昇調（R）も現れうるため、仮に主強勢を担う音節の音調を「高平」と指定してしまうと、なぜ下降調や上昇調が現れうるのかが説明できなくなってしまうからである。特に下降調はAcc2の音調形において一貫して現れる音調であり、従って、末尾音節に主強勢の現れる語の音調が果たしてAcc1なのかAcc2なのか、音韻論的な位置付けを明らかにする必要も生じてくる。

そこで筆者は、Acc1の音調型における真に有意義な特徴は、主強勢を担う音節の直後での音調の下降と捉え、当該音節内部の音調に関しては規定されていない自由な状態である、という解釈を提案する。この解釈を採用することで、主強勢を伴う音節に現れる「高平調～短い

上昇調～下降調」といった音調間の交替を過不足無く説明することが可能となる。例えば *vinter* [vín.tɔŋ HL]「冬」のように第一音節に主強勢を有する語における高平調は、当該音節直後の音調の下降の出発点のために「高」として実現していると捉えることができる。

また、*Amerika* [a.mé:.ɛi.ka MHML～MRML]「アメリカ」のような第一音節以外の音節に主強勢の現れる語に見られる短い上昇調は、先行する音節の中程度の音調から下降の出発点である「高」へと一気に到達させることが音声生理学的に困難なために、音調を漸次的に「高」へと高めた結果生じたものとして説明することが可能である。さらに、*avis* [a.ú:ɪs MH～MF]「新聞」など末尾音節が主強勢を担う語にみられる下降調は(狭義の)イントネーションの一種と考えられ、発話の末尾を標示するために現れたものとして説明することが可能である。このことは、*avis* など末尾音節に主強勢の現れる語に観察される下降調と Acc2 の音調形に観察される下降調が根本的に異質のものであることを意味しており、従って、*avis* などにおける下降調を Acc2 として解釈することは誤りであることが明らかとなる。

このような解釈を採ることで、Acc1 の語において主強勢を担う音節が、一方では後続する音節と常に「高低」の関係にあるにもかかわらず、他方では任意で短い上昇調や下降調をもとり得るという事実を過不足なく説明することが可能となる。

5.3 アクセントの弁別的特徴

これまでの考察から、Sandnes 方言の Acc1 と Acc2 の音調はいずれも下降調から成り立っており、Acc1 では主強勢を担う音節の直後に、一方 Acc2 では主強勢を担う音節の内部に下がり目が現れることが明らかとなった。ここから、Acc1 と Acc2 の対立において真に弁別的な特徴は、(先行研究の唱える音調の「種類」の違いではなく)音調の下がり目の違い、つまり下がり目が主強勢を担う音節に対して早く現れるか遅く現れるかという「位置」の違いである、と結論づけることができる。

6. 「強さ」か「高さ」か?

ここまでは音調の解釈が中心であったが、果たして Sandnes 方言において音調と強勢はいかなる関係にあるのだろうか。従来、ノルウェー語やスウェーデン語など強勢に加えて音韻論的に有意義な音調も有する言語のアクセントは、「高低アクセントと強弱アクセントの併存」や「(高低アクセントと強弱アクセントとは別の)中間的なアクセント」(例:福盛 2002、城生 2008)であると唱えられてきた⁹⁾。

これに対し筆者は、Sandnes 方言において強勢と音調は音韻論的には同等の資格を有してはおらず、飽くまでもアクセントとしてはストレス(強さ、強弱)アクセントであると考ええる。その論拠として複合語の例を以下に示す:

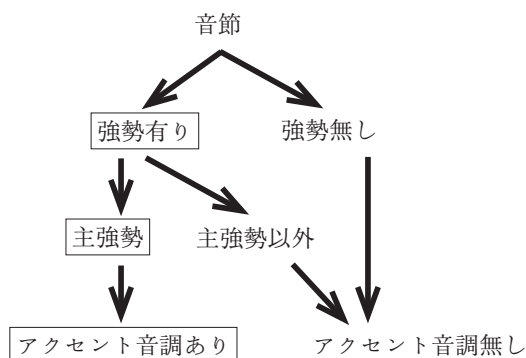
- (7) a. *appelsinmarmelade* [¹ap.pəl.sín.maʁ.mə.là:.də MMHMMML]「オレンジマーマレード」
 (<*appelsin* [¹ap.pəl.sín MMH]「オレンジ」+*marmelade* [²maʁ.mə.lá:.də MMLF]「マーマレード」)
 b. *hormonbalanse* [¹hɔʁ.mó:n.ba.làn.sə MHMML]「ホルモンバランス」

(*<hormon* [ˈhɔ̃k.mó:n MH] 「ホルモン」 + *balance* [ˈba.láŋ.sə MHL] 「バランス」)

既に拙論(2011a: 67)において述べたように、Sandnes 方言では、複合語を形成する際、第一要素が本来有する主強勢が複合語全体の主強勢として現れ、その他の構成要素が単独形で有していた主強勢は、副次強勢など強さの度合いの低い強勢として現れる。ここで注意すべきは、複合語全体のアクセント音調、すなわち Acc1 を特徴づける高平調ないし Acc2 を特徴づける下降調は、単純語の場合と同様、主強勢を担う音節にのみ現れ、副次強勢など強さの程度の低い強勢を伴う音節には現れないという点である。

この事実は、アクセント音調と強勢の間に一種の「主従関係」が成立することを意味し、アクセント音調と強勢は Sandnes 方言の音韻論において「併存」するような対等の位置付けにあるのではないことを示す。Sandnes 方言における強勢とアクセント音調の従属関係を図示すると以下の通り：

(8) 強勢とアクセント音調の間の従属関係



以上から、Sandnes 方言のアクセントは、音調の下がり目の位置の異なる二種類の主強勢を「アクセント核」とするストレスアクセントであると結論づけることができる。

なお、Sandnes 方言のストレスアクセントが英語やドイツ語などのいわば典型的なストレスアクセントと大きく異なる点は、Sandnes 方言の場合、主強勢を担う音節の音調が音韻論的に有意義であるという点である。無論、英語やドイツ語においても、主強勢を担う音節には様々な音調が現れるが、これらの音調の「向き」は音韻論的には意味を持たない(川上 1973)。換言すれば、Sandnes 方言も英語も、主強勢を担う音節に種々の音調が現れるという点では共通するが、Sandnes 方言では音調が語のレベルで規定されているのに対し、英語やドイツ語では語レベルではなく文レベルで規定されており、「平叙文」や「疑問文」といった文の機能に合わせて音調が現れる点で異なるのである。

Sandnes 方言のように、アクセント核の音調が語レベルで音韻論的に意味を持つタイプのストレスアクセントを(暫定的に)「音楽的ストレスアクセント musical/tonal stress accent」と呼び、一方、英語のようにアクセント核の音調が語レベルでは音韻論的に意味を

持たないタイプのストレスアクセントを(暫定的に)「(律) 動的ストレスアクセント dynamic/rhythmical stress accent」と呼ぶことにする¹⁰⁾。

7. 結語

7.1 まとめ

以上、本稿ではノルウェー語 Sandnes 方言のアクセントに関して、特に音調型の音韻論的解釈並びに音調と強勢の相関関係に重点をおいて詳細に論じた。その結果、以下の三点を結論として導いた：1) Sandnes 方言の Acc1 と Acc2 はいずれも下降調という種類の音調から成り立っている；2) 主強勢を担う音節に対する音調の下降の相対的な位置の違い、すなわち Acc1 では当該音節の直後に、Acc2 では当該音節の内部に下降が現れる点が、Acc1 と Acc2 の音調型を区別する上で真に音韻論的に有意義な特徴である；3) Sandnes 方言のアクセントは、位置の異なる二種類の下降調のいずれかを伴う強勢がアクセント核であるストレスアクセントの一種である。

7.2 今後の課題

Acc1 と Acc2 の音調型の本質的な特徴や音調と強勢の間の相関関係など、本研究では Sandnes 方言のアクセントに関する重要な側面を明らかにしてきたが、その一方で、未だ十分に考察のなされていない点も残る。現時点では、次の二点が今後の研究課題として挙げられる。

まず第一に、アクセント核である主強勢の位置に関して。本研究では、例えば表 1 及び表 2 に示した語例からも読み取れるように、ひとまずは主強勢の位置が語の特定の音節に限定されないものとして扱ってきた。しかしながら、これは飽くまでも Sandnes 方言において実際に観察される強勢の型を列挙したに過ぎず、主強勢の分布を決定する音韻論的なメカニズムが背後にあるか否かについては全く議論してはいない。従って、今後の課題として、主強勢の分布が、例えば語(単純語)の音節数や音節構造、語種などの情報から予測可能であるかどうか、詳細に検討していく必要がある。

第二の課題としては、音調の下降を担う単位としてモーラを認定する必要があるかという点が挙げられる¹¹⁾。というのも、本研究で筆者が提案した音調の下降の位置の違い、すなわち主強勢を担う音節の内部での下降と直後での下降という違いを認めることは、上野善道教授の言(私信：2011 年 11 月 28 日)を借りるならば、「音節を割る」ことを要求し、自ずとモーラの有無の議論へと繋がるからである。

近年、音韻理論の領域では、世界の多くの言語において「音節」と「モーラ」が単一の韻律体系において共存し得る単位であると主張され、英語にもモーラの存在を認める立場が主流となりつつある(例：窪田 2002)。しかしながら、このような音韻理論の潮流に対して、筆者は懐疑的である。というのも、「音節」と「モーラ」の両方を持つ言語において、果たして「モーラ」がその言語の音韻論を記述する上で真に必要な単位であるか否かが十分に議論されているかどうか、甚だ疑問を感じるからである。「モーラ」に限らずいかなる言語単位も、「設定し得るか否か」という可能性の視点と「設定する必要性があるか否か」という存在意義の視点の両方から検討する必要があるが、少なくとも筆者の感ずるところでは、

「音節」に加えて「モーラ」も備えているとされる言語に関しては、これらの議論を十分に経ることなく「モーラ」の有用性や普遍性ばかりが主張されてきた嫌いがある。

筆者は、既にデンマーク語のモーラに関しては私見を述べてきたが（三村 2008）、そこでは、上野（2001: 8）に倣い「音節は音声言語にとって不可欠であり、したがって自然言語の全てに必要な単位であると捉えるが、一方、モーラは持つ言語と持たない言語があり、当該言語の音韻現象を説明する上で必要ならば設定すべきである」という立場を貫いてきた。今後、Sandnes 方言に関してもこの立場に徹し、モーラの必要性について考察を進めていきたい¹²⁾。

今後は、上記の二点を中心に Sandnes 方言のアクセント体系のさらなる考察を進め、より詳細なアクセント体系の全体像の解明を目指したいと思う。

◆ 本稿は、日本言語学会第143回大会（2011年11月26日、大阪大学豊中キャンパス）での口頭発表の内容及び予稿集原稿（三村 2011c）に、追加並びに修正を加えて発展させたものである。口頭発表の際に有益なコメントを下された聴衆の方々、特に上野善道先生（東京大学名誉教授、国立国語研究所）、小林正人先生（東京大学大学院人文社会系研究科）、松浦年男先生（北星学園大学）の諸氏にこの場をお借りして深くお礼を申し上げる。
E-mail: m.tatsu@d8.dion.ne.jp

註

- 1) インフォーマントは Brede Tingvik Haave さん（1988年生、男性）。大学進学のため首都 Oslo に移り住むまで Sandnes に居住。ご両親もおそらく Sandnes の出身であるとのこと。本研究の調査に尽力して下さった Tingvik Haave さんにこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。
- 2) 例えば、Sandnes 方言では、強勢を伴う短母音が無声阻害音からなる子音連結に先行する場合、当該母音の末尾にわずかな無声化の生じる、いわゆる「前気音 preaspiration」が確認されているが（例: *jakke* [jáʰk.kə FL]「上着」）、本稿での音声表記では全て割愛した。なお、これまでの拙論（2011b、c）において前気音の語例として *kaffi*「コーヒー」を挙げていたが、これは筆者の誤りである。
- 3) たとえば、Bokmål で特徴的な「反舌音 retroflexes」は Sandnes 方言には無く、また Bokmål では舌尖の「はじき音 flap」（あるいは「ふるえ音 trill」）として現れる r の音が Sandnes 方言では（デンマーク語と同じく）「有声口蓋垂摩擦音」として現れる点が特徴的である。
- 4) 本稿で用いる略号は以下の通り: adj.「形容詞」、adv.「副詞」、fem.「女性」、inf.「動詞不定形（英文法でいう「原形」に相当）」、masc.「男性」、neut.「中性形」、pl.「複数形」、pres.「現在形」、sg.「単数形」。
- 5) Sandnes 方言に関するものではないが、ノルウェー語（おそらく Bokmål を指すと思われる）の（高さ、ピッチ）アクセントが「二型アクセント」や「語声調」に準ずるという言及は、亀井孝ほか編著（1995）、『言語学大辞典 第6巻 述語編』所収の「アクセント」の項にも見られる:（また、）語の長さにかかわらず2種類しかないという点では、（先に述べた）語声調ないし二型アクセントと似た性質のものである（p.7; 括弧は筆者）。
- 6) 「アクセント」という用語及び概念が研究分野や研究者により多様である点に関しては、例えば Fox（2000: 114-115）を参照されたい。
- 7) 以下に示す筆者のアクセント観は、筆者の恩師である上野善道教授の理論（例えば上野（1980, 2002））に多くを負っている。
- 8) アクセント句に関する詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、本稿の議論を理解する限りにおいては、例えば英語などのイントネーション研究で唱えられている tone unit/group や intonation unit/phrase にほぼ相当するものと考えて差し支えない。なお、アクセント句の切り方は、それが被さる発話の意味内容に応じて変動しうる点に注意されたい。例えば、本文に引用した *Du må komme tidligt* は、(4a) に示したように *Må jeg komme tidligt?* という問いの返答としては “*Du må komme*” と “*tidligt*” という二つのアクセント句に切れる

が、問に対する返答といった文脈がない場合は文全体が一つのアクセント句を成し、*tidligt* がアクセント音調を担う。

- 9) 城生 (2008) は注において「私の教え子である福盛貴弘氏は福盛貴弘 (2002) において、強さと高さの中間にあるアクセントをツヨサの「ツ」とタカサの「カサ」のコンタミネーションから、「つかさアクセント」と命名している」と言及しつつ、「スウェーデン語やノルウェー語などでは、高さと強さは別に強さアクセントが区別されている。このような例を並べてみると、強さアクセントと高さアクセントだけではいささかオーバーロードであり、両者の中間にもうひとつ別の新たな分類上の名称を設けた方が妥当であるということになる」と自らの見解を述べている。
- 10) 拙論 (2009) で用いた用語に若干の改良を加えたが、未だに暫定的な名称であること点に留意されたい。今後、読者諸氏の批判や助言を仰ぎながらより適切な用語を模索したい。
- 11) ここで述べるモーラの有無に関する議論は、日本言語学会第 143 回大会における口頭発表の際に聴衆から頂いたコメントに基づいている。
- 12) この他にも、後日、聴衆の内のお一方から貴重な助言を頂いた。Sandnes 方言の特にアクセント音調の解釈に関するもので、「Acc2 には主強勢を担う音節に音調の下降があるが、Acc1 には下降がない」とする解釈案である。本稿では、この案を、日本語アクセント論の用語を借りて「無核説」と呼ぶことにする。「無核説」では、Acc1 の語における高平調は強勢の特性によるものとして捉えられるという。筆者なりに「無核説」の立場に立ち Sandnes 方言のアクセント音調を考察すると、Acc2 の語における下降調は主強勢を伴う音節が担う「下げ核」によるものであるが、Acc1 の語における高平調からの漸次的な音調の下降は、音調の自然下降によるものと考えられる。この立場に立つと、例えば、絶対語末の位置に主強勢の現れる Acc1 の語における下降調が音声学的により自然に説明でき、また、筆者の解釈案では必要となる「モーラ」の概念をそもそも必要とすることが無く、筆者のアクセント解釈を改善する上で利するところが大きい。しかしながら、Acc2 の語において当該音節の内部で起こる音調の下降が、モーラではなく音節に「下げ核」を与えることで果たして説明が可能かどうか、疑問も残る。いずれにしても、この「無核説」は検討に値する非常に魅力的な代案であり、今後、慎重にその検討を進めていきたいと思う。

参考文献

- アジア・アフリカ言語文化研究所 (1967). 『アジア・アフリカ言語調査表 上・下』。東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Borgström, Carl Hj. (1938). "Zur phonologie der norwegischen Schriftsprache." *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 9, pp. 250-273.
- Fox, Anthony (2000). *Prosodic Features and Prosodic Structure: The Phonology of Suprasegmentals*. Oxford: Oxford University Press.
- Hansen, Aage (1956). *Udtalen i moderne dansk*. København: Gyldendal.
- 早田輝洋 (1988). 「「アクセント」早わかり」. 『月刊言語』 Vol. 7, No. 3. 東京：大修館書店, pp. 32-39.
- 早田輝洋 (1999). 『音調のタイポロジー』。東京：大修館書店。
- 福盛貴弘 (2002). 「つかさアクセント考」. 『認知科学研究』 第一号. 室蘭認知科学研究会, pp. 21-40.
- 城生 佰太郎 (2008). 『一般音声学講義』。東京：勉誠出版。
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編著 (1996). 『言語学大辞典 第 6 巻 述語編』。東京：三省堂。
- 川上 葵 (1973). 『日本語アクセント法』。東京：学書房。
- Kristoffersen, Gjert (2000). *The Phonology of Norwegian*. Oxford: Oxford University Press.
- 窪 蘭晴夫 (2002). 「音節とモーラの機能」. 窪 蘭晴夫、本間猛編. 『音節とモーラ』。東京：研究社, pp. 1-96.
- 三村 竜之 (2008). 「デンマーク語モーラ説の批判的検討」. 『東京大学言語学論集』 27,

- p. 147-161.
- 三村竜之 (2009). 「ストレスアクセントの多様性: ストレスアクセントの類型論に向けて」. 『東京大学言語学論集』 29, pp. 183-193.
- 三村竜之 (2010a). 「ノルウェー語 Sandens (サンネス) 方言のアルファベット頭文字語の音韻論」. 日本音韻論学会 2010 年度春期研究発表会 (2010 年 6 月 18 日、産学公連携センター・秋葉原サテライトキャンパス).
- 三村竜之 (2010b). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則」. 『日本言語学会第 140 回大会予稿集』, pp. 182-187.
- 三村竜之 (2011a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則」. 『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』 第 19 号, pp. 63-77.
- 三村竜之 (2011b). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言におけるアルファベット頭文字語の音韻論」. 『音韻研究』 第 14 号, pp. 19-26.
- 三村竜之 (2011c). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言のアクセント: アクセントの抽出とその弁別の特徴」. 『日本言語学会第 143 回大会予稿集』, pp. 244-249.
- Mimura, Tatsuyuki (2009). *Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description*. 未刊行博士学位申請論文. 東京大学.
- Oftedal, Magne (1947). "Jærske okklusivar." *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 14, pp. 229-235.
- Oftedal, Magne (1972). "Rural and urban dialects in a corner of Norway." Eds., Evelyn Scherabon Firchow, Kaaren Grimstad, Nils Hasselmo, Wayne A. O'neil. *Studies for Einar Haugen: Presented by friends and colleagues*. The Hauge/Paris: Mouton, pp. 419-436.
- Selmer, Ernst W. (1927). *Den musikalske aksent i Stavanger-målet*. Oslo: Det norske videnskaps-akademi i Oslo.
- 上野善道 (1980). 「アクセントの構造」. 柴田武編. 『講座 言語 第一巻 言語の構造』. 東京: 大修館書店, pp. 87-134.
- 上野善道 (1984). 「N 型アクセントの一般特性について」. 平山輝男博士古希記念会編. 『現代方言語学の課題 2 記述的研究篇』. 東京: 明治書院, pp. 167-209.
- 上野善道 (2001). 「日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ」. 『国語研究』 64, pp. 8-16.
- 上野善道 (2002). 「アクセント記述の方法」. 飛田良文、佐藤武義編. 『現代日本語講座 第 3 巻 発音』. 東京: 明治書院, pp. 163-186.
- Vanvik, Arne (1956). "Norske tonelag." *Maal og Minne* 1956, pp. 92-12. [Eds., Ernst Håkon Jahr and Ove Lorenz. 1983. *Prosodi/Prosody* (Studier i norsk språkvitenskap 2). Oslo: Novus forlag, pp. 209-219. に再録]
- Vanvik, Arne (1979). *Norsk fonetikk: Lydlæren i standard østnorsk supplert med materiale fra dialektene*. Oslo: Fonetisk institutt, Universitetet i Oslo.



図1 ノルウェー全体から見た Rogaland Fylke の位置
(<http://en.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)



図2 Rogaland Fylke における Sandnes Kommune の位置
(<http://da.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)